

## 唱歌集の研究 ～調性・音域・ヨナ抜き音階の観点から～

The study of Songs for School children

from the point of view of the tonality and the range and the musical scale without 'fa' and 'si'

堀江英一

HORIE Hidekazu

明治期の唱歌集から最後の国定教科書、終戦直後に発行された民間の小学校音楽教科書に至るまで、掲載された歌唱教材がどのような調性を用いているか、音域にはどのような特徴があるか、ヨナ抜き音階をどの程度用いているかを調査した。

その結果、調性は、時代が進むにしたがって今日のような限られた種類になっていったこと、音域は明治の終わり頃に今日のような音域が一般的になったことが分かった。ヨナ抜き音階は、明治 30 年代頃から用いられるようになったと解釈できること、学年が進むにしたがってその割合が少なくなる傾向があることが分かった。

キーワード：唱歌、歌唱教材、調性、音域、ヨナ抜き音階

### I 問題の所在

自著『富山県の校歌の研究～調性・音域・ヨナ抜き音階の観点から～』で、富山県内の校歌の調性を調査した結果、古い時代に作られたものほど調性が多岐にわたり、時代が新しくなるにしたがって C Dur、F Dur、G Dur といった特定の調性に整理されてくることが分かったが、この傾向がどのような理由によるものなのかがはっきりしなかった。

そこで、明治以来数多くつくられた唱歌集や文部省編纂の唱歌集および国定音楽教科書に掲載された曲について、その調性と音域を調査することによって、理由が明らかにできると考えた。

また、富山県内の校歌にヨナ抜き音階がどの程度用いられているかについても調査し、旧制学校、新制小・中・高等学校では時代が新しくなるにしたがって用いられなくなっていったことが分かったが、明治期の唱歌集から始まる唱歌集の歴史のなかでヨナ抜き音階がどのような用いられ方がされているかを調査することによって校歌と比較できることになり有意義だと考えた。

### II 研究の方法

明治期に民間で発行された唱歌集、文部省編纂の唱歌集および国定教科書に掲載された曲の調性、ヨナ抜き音階の割合を調査し、その傾向を明らかにする。

調査した唱歌集および国定教科書は次の通りである。

・文部省音楽取調掛、小学唱歌集（1882～1884）

- ・文部省音楽取調掛、幼稚園唱歌集 (1887)
- ・大和田建樹、奥好義、明治唱歌 (1888～1892)、中央堂
- ・東京音楽学校、中等唱歌集 (1889)
- ・井沢修二、小学唱歌 (1892)、大日本図書株式会社
- ・納所辨次郎、田村虎蔵、教科適用幼年唱歌 (1900～1901)、十字屋
- ・東京音楽学校、中学唱歌集 (1901)
- ・東くめ、瀧廉太郎、鈴木毅、幼稚園唱歌 (1901)、共益商社楽器店
- ・小山作之助、新撰国民唱歌 (1901)、開成館
- ・納所辨次郎、田村虎蔵、教科統合少年唱歌 (1903～1905)、十字屋
- ・東京音楽学校、中等唱歌 (1909)
- ・文部省、尋常小学唱歌 (1912～1914)
- ・文部省、新訂尋常小学唱歌 (1932)、大日本図書株式会社
- ・文部省、新訂高等小学唱歌 (1935)、大日本図書株式会社
- ・文部省、ウタノホン、うたのほん、初等科音楽一～四、高等科音楽一男子用、高等科音楽一女子用 (1941～1943)
- ・文部省、1年生のおんがく～6年生の音楽 (1950)、教育藝術社
- ・市川都志春ほか、1年生のおんがく～6年生の音楽 (1950～1957)、教育藝術社

### III 調性

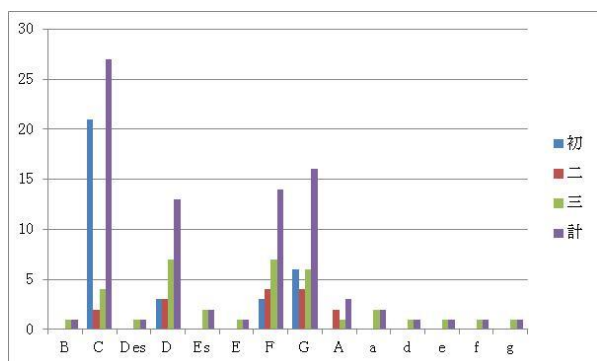
#### 1 傾向

わが国で最初に編纂された『小学唱歌集 全三編』(文部省音楽取調掛編、1882〈明 15〉年 4月～1884〈明 17〉年 3月)の調性は次の通りである。

表1 『小学唱歌集』の調性

	B	C	Des	D	Es	E	F	G	A	a	d	e	f	g	日本
初		21		3			3	6							
二		2		3			4	4	2						1
三	1	4	1	7	2	1	7	6	1	2	1	1	1	1	4
計	1	27	1	13	2	1	14	16	3	2	1	1	1	1	5

表2 『小学唱歌集』の調性



これを見ると、長調では今日でもよく用いられる C Dur、F Dur、G Dur が多いが、今日ではほとんど用いられない D Dur も13曲となっている。ほかには、B Dur、Des Dur、Es Dur、A Dur のように今日では用いられない調性も1～2曲入っている。短調では、f moll や g moll のように今日あまり用いられない調性が見られる。

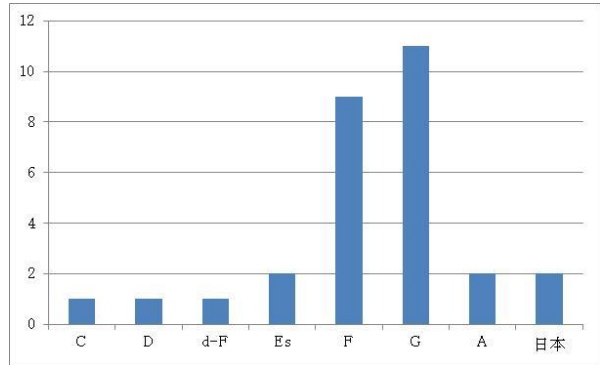
また、わが国の伝統音楽の旋法によるものも

見られる。

『幼稚園唱歌集』（文部省音楽取調掛編纂、1887〈明20〉年12月）の調性は次の通りである。

表3.4 『幼稚園唱歌集』の調性

C	D	d-F	Es	F	G	A	日本
1	1	1	2	9	11	2	2



G Dur と F Dur がとても多く、全体の約70%を占めている。現在でよく用いられる C Dur が1曲しかない。ほかには、D Dur、d moll から F Dur に転調するものも1曲ずつある。#が3つつく A Dur や ♭が3つつく Es Dur、わが国の伝統音楽の旋法による曲も見られる。

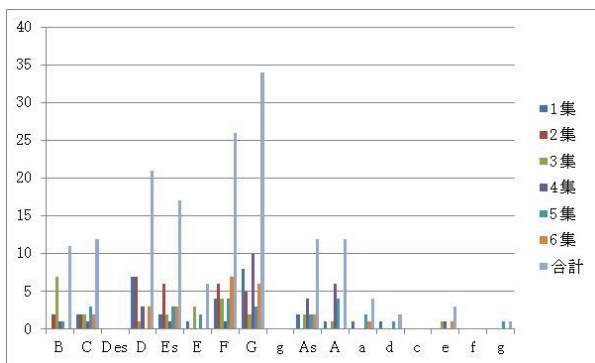
『明治唱歌 全六集』（大和田建樹、奥好義共編、中央堂、1888〈明21〉年5月～1892〈明25〉年4月）は、外国曲が多いこと、歌詞のほとんどが『鉄道唱歌』の作詞で知られる大和田建樹によるのが特徴である。

調性は次の通りである。

表5 『明治唱歌集』の調性

	B	C	Des	D	Es	E	F	G	g	As	A	a	d	c	E	f	g	日本
1集		2		7	2	1	4	8		2	1	1	1					
2集	2	2		7	6		6	5										1
3集	7	2		1	2	3	4	2		2	1				1			2
4集	1	1		3	1		1	10		4	6				1			1
5集	1	3			3	2	4	3		2	4	2	1				1	3
6集		2		3	3		7	6		2		1			1			
合計	11	12	0	21	17	6	26	34	0	12	12	4	2	0	3	0	1	7

表6 『明治唱歌集』の調性



G Dur、F Dur が多いが、C Dur は以外と少ない。D Dur、Es Dur、As Dur、A Dur、B Dur など、今日ではめったに用いられない調性が二桁数あるのが特徴である。

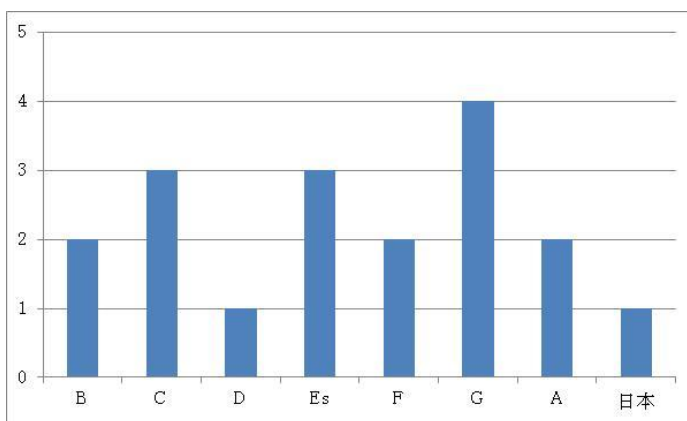
わが国の伝統音楽の旋法によるものも見られる。

短調も、a moll、d moll、e moll、g moll と種類が多いのが特徴である。

『中等唱歌集』（東京音楽学校編、1889〈明22〉年12月）の調性は次の通りである。G Dur が4曲、C Dur と Es Dur が3曲、B Dur、F Dur、A Dur が2曲で、D Dur とわが国の伝統音楽の旋法によるものが1曲である。

表7,8 『中等唱歌集』(1889年)の調性

B	C	D	Es	F	G	A	日本
2	3	1	3	2	4	2	1

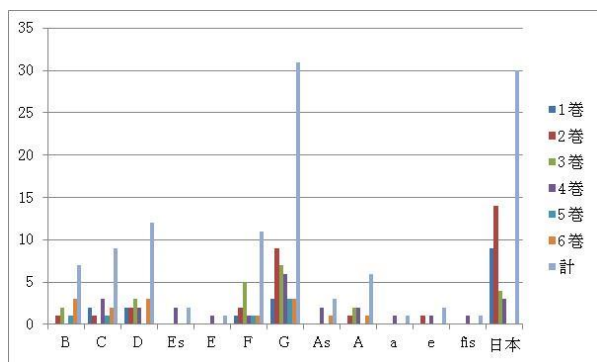


『小学唱歌 全六巻』(井沢修二編、大日本図書株式会社、1892〈明25〉年3月)は、編纂した井沢修二がわが国で最初の唱歌集『小学唱歌』を編纂しながら、辻文部大臣との意見の対立から非職となった後に、自分の理想を実現すべく編纂したものである。調性は次の通りである。

表9 『小学唱歌』(井沢修二編)の調性

巻	B	C	D	Es	E	F	G	As	A	A	e	fis	日本
1巻		2	2			1	3						9
2巻	1	1	2			2	9		1		1		14
3巻	2		3			5	7		2				4
4巻		3	2	2	1	1	6	2	2	1	1	1	3
5巻	1	1				1	3						
6巻	3	2	3			1	3	1	1				
計	7	9	12	2	1	11	31	3	6	1	2	1	30

表10 『小学唱歌』(井沢修二編)の調性



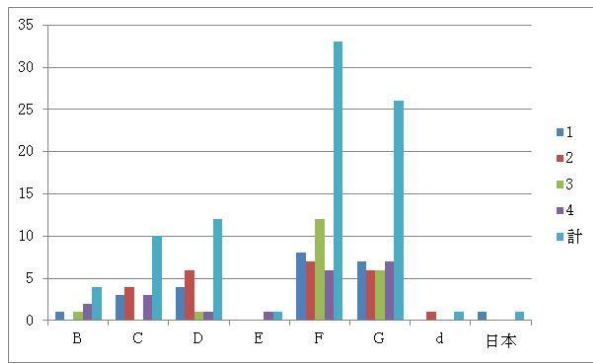
G Dur とわが国の伝統音楽の旋法が飛び抜けて多いのが分かる。次いでF Dur、D Dur、C Dur、B Dur、A Dur の順になっている。この時代、先の『小学唱歌集』『明治唱歌』と同様に、D Dur、B Dur、A Dur が比較的用いられていたことがわかる。また、♯が4つつく E Dur や fis moll、♭が4つつく As Dur などもある。

『教科適用幼年唱歌 全十冊』(納所辨次郎、田村虎蔵共編、十字屋、1900〈明22〉年8月～1901〈明23〉年5月)の調性は次の通りである。

表11 『教科適用幼年唱歌』の調性

	B	C	D	E	F	G	d	日本
1	1	3	4		8	7		1
2		4	6		7	6	1	
3	1		1		12	6		
4	2	3	1	1	6	7		
計	4	10	12	1	33	26	1	1

表12 『教科適用幼年唱歌』の調性

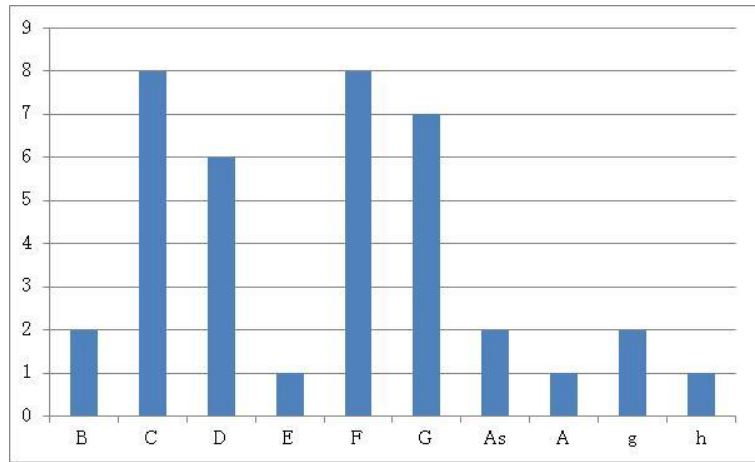


F Dur と G Dur が圧倒的に多く、次いで D Dur、C Dur の順になっている。また、D Dur も12曲と少なからずある。今日あまり用いられない D Dur は、前述の音楽取調掛編『小学唱歌』、『明治唱歌』、『教科適用幼年唱歌』でも数が多く、この時代の特徴といえる。また、B Dur も4曲ある。♯が4つつく E Dur も1曲見られる。

『中学唱歌集』（東京音楽学校編、1901〈明23〉年3月）の調性は次の通りである。

表13,14 『中学唱歌集』の調性

B	C	D	E	F	G	As	A	g	h
2	8	6	1	8	7	2	1	2	1



C Dur と F Dur が多く、次いで G Dur、D Dur の順になっている。また、B Dur、As Dur、g moll が2曲ずつあるほか、E Dur、h moll といった今日では用いられない調性による曲も1曲ずつある。

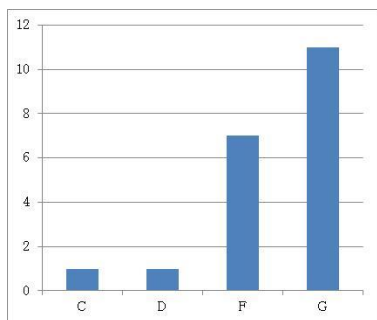
わが国で初めてのピアノ伴奏付き唱歌集である『幼稚園唱歌』（東くめ、瀧廉太郎、鈴木毅共編、共益商社楽器店、1901〈明23〉年7月）の調性は次の通りである。

表15 『幼稚園唱歌』の調性

C	D	F	G
1	1	7	11

用いられている調性は G Dur、F Dur、C Dur、D Dur と種類が限定されているが、この時期によく用いられる D Dur が1曲ある。

表16 『幼稚園唱歌』の調性



瀧らによるこの唱歌集は、ほかの唱歌集に見られるような調号の多い調性は用いられていない。実際の現場で用いやすいよう、またこの時期の子どもたちが歌いやすいよう、考えて調性の選定が行われていることが見て取れる。

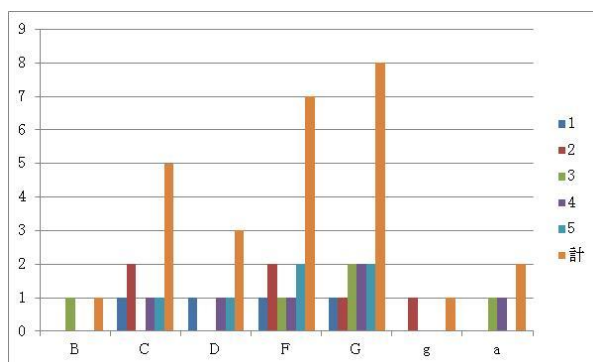
わが国で初めて伴奏が付けられていること、調性を考慮して選定していることに、歌曲集『四季』に見られるような本格的な優れた唱歌集を世に出さんとするとする瀧らの意気込みを感じることができる。

『新撰 国民唱歌』（小山作之助編、開成館版、1901〈明23〉）の調性は次の通りである。

G Dur と F Dur が多く、C Dur がそれに次ぐ。また、この時代の特徴である D Dur も3曲ある。G moll、a moll といった短調の曲もある。

表17,18 『新撰国民唱歌』の調性

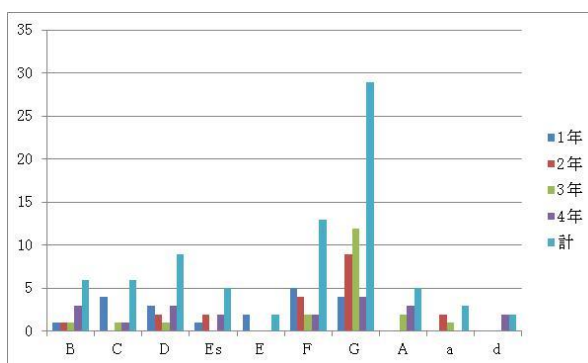
	B	C	D	F	G	g	a
1		1	1	1	1		
2		2		2	1	1	
3	1			1	2		1
4		1	1	1	2		1
5		1	1	2	2		
計	1	5	3	7	8	1	2



『教科統合少年唱歌 全八編』（高等小学校用、納所辨次郎、田村虎蔵共編、十字屋、1903〈明25〉年4月～1905〈明27〉年10月の調性は次の通りである。

表19,20 『教科統合少年唱歌』の調性

	B	C	D	Es	E	F	G	A	a	d
1年	1	4	3	1	2	5	4			
2年	1		2	2		4	9		2	
3年	1	1	1			2	12	2	1	
4年	3	1	3	2		2	4	3		2
計	6	6	9	5	2	13	29	5	3	2

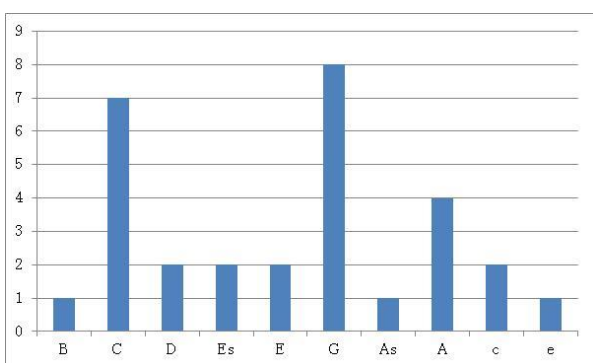


G Dur と F Dur が多く、次いで多いのは D Dur で、この時代の特徴が出ている。また、C Dur、B Dur、Es Dur、A Dur も5～6曲ある。短調は a moll と d moll が用いられている。

表21 『中等唱歌』（1909年）の調性

B	C	D	Es	E	G	As	A	c	e
1	7	2	2	2	8	1	4	2	1

表22 『中等唱歌』（1909年）の調性



『中等唱歌』（東京音楽学校編、1909〈明42〉年5月）の調性は次の通りである

G Dur と C Dur が多く、不思議なことに F Dur は用いられていない。次いで多いのは A Dur で、ほかには D Dur、B Dur、Es Dur が用いられている。＃が4つつく E Dur、b が4つつく As Dur も用いられている。短調は c moll、e moll が用いられている。唱歌集によって、さまざまな調性が用いられるのはこの時代の特徴であり、今日のように限られた調性になる前段階の状態であったと考えることができる。

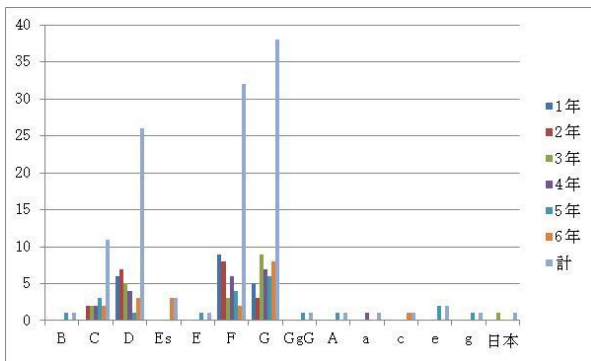
1902（明35）年に発覚した教科書疑獄事件をきっかけに、文部省は国定教科書化の動きを加速させ、「唱歌」科の教科書も国定教科書に準じる扱いとなった。学年毎の分冊になっていない『尋常小学読本唱歌』を経て、各学年分冊の『尋常小学唱歌』が文部省によって編纂された。

『尋常小学唱歌』(文部省、1912〈明45〉年5月～1914〈大3〉年6月)の調性は次の通りである。

表23 『尋常小学唱歌』の調性

	B	C	D	Es	E	F	G	GgG	A	a	c	e	g	日本
1年			6			9	5							
2年		2	7			8	3							
3年		2	5			3	9							1
4年		2	4			6	7			1				
5年	1	3	1		1	4	6	1	1			2	1	
6年		2	3	3		2	8				1			
計	1	11	26	3	1	32	38	1	1	1	1	2	1	1

表24 『尋常小学唱歌』の調性

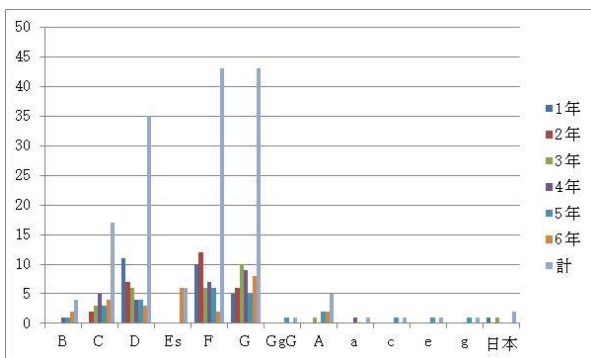


G Dur と F Dur が多く、次いで D Dur、C Dur の順である。やはり D Dur はこの時代の特徴のように思われる。ほかには、B Dur、Es Dur、E dur、A Dur がある。また、D Dur→g moll→G Dur のように転調する曲もある。短調は、a moll (橋中佐)、c moll (児島高德)、e moll (大塔宮)、g moll (水師營の会見) が見られる。

表25 『新訂尋常小学唱歌』の調性

	B	C	D	Es	F	G	GgG	A	a	c	e	g	日本
1年			11		10	5							1
2年		2	7		12	6							
3年		3	6		6	10		1					1
4年	1	5	4		7	9			1				
5年	1	3	4		6	5	1	2		1	1	1	
6年	2	4	3	6	2	8		2					
計	4	17	35	6	43	43	1	5	1	1	1	1	2

表26 『新訂尋常小学唱歌』の調性



『新訂 尋常小学唱歌』(文部省、大日本図書株式会社、1932〈昭7〉年)の調性は下記の通りである。

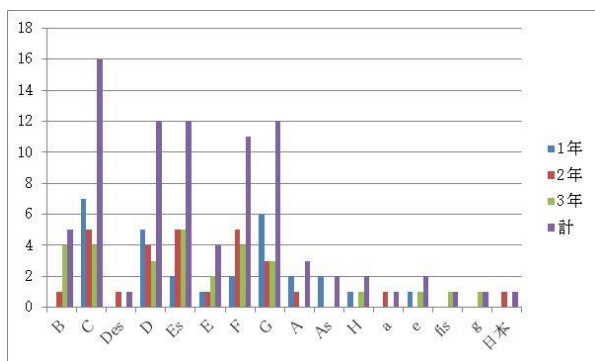
G Dur と F Dur が多く、次いで D Dur が多くなっている。D Dur が多いという特徴はここでも見られる。また、B Dur や Es Dur、A Dur も若干見られる。

『新訂 高等小学唱歌』（文部省、大日本図書株式会社、1935〈昭10〉年3月）の調性は次の通りである。

表27 『新訂高等小学唱歌』の調性

	B	C	Des	D	Es	E	F	G	A	As	H	a	e	fis	g	日本
1年		7		5	2	1	2	6	2	2	1		1			
2年	1	5	1	4	5	1	5	3	1			1				1
3年	4	4		3	5	2	4	3			1		1	1	1	
計	5	16	1	12	12	4	11	12	3	2	2	1	2	1	1	1

表28 『新訂高等小学唱歌』の調性



最も多いのはC Durで、次いでD Dur、Es Dur、G Durが同数の12曲である。F Durも多く、11曲である。また、B Dur、Des Dur、Es Dur、E Dur、A Dur、As Dur、H Durと、調性は多岐にわたっている。短調も、fis mollという珍しい調性が2曲もある。こ

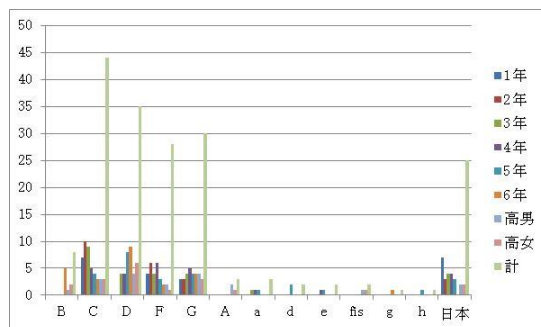
国民学校のために編纂された『ウタノホン うたのほん 初等科音楽一〜四 高等科音楽一（男

子用、女子用）』（文部省、1941〈昭16〉年3月〜1943〈昭18〉年4月）の調性は次の通りである。

表29 「国民学校の教科書」の調性

	B	C	D	F	G	A	a	d	e	fis	g	h	日本
1年		7		4	3								7
2年		10		6	3								3
3年		9	4	4	4		1						4
4年		5	4	6	5		1		1				4
5年		4	8	3	4		1	2	1			1	3
6年	5	3	9	2	4						1		
高男	1	3	4	2	4	2				1			2
高女	2	3	6	1	3	1				1			2
計	8	44	35	28	30	3	3	2	2	2	1	1	25

表30 「国民学校の教科書」の調性



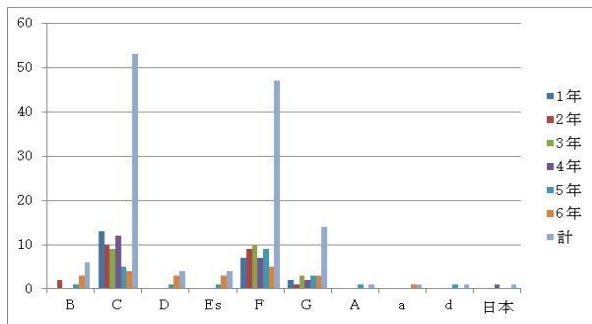


最も多いのはC Durで44曲である。次いでD Dur、G Dur、F Durが多い。わが国の伝統音楽の旋法によるものも25曲と多くなっている。やはりD Durはこの時代の特徴であろうか。

表31 『一年生のおんがく～六年生の音楽』の調性

	B	C	D	Es	F	G	A	a	d	日本
1年		13			7	2				
2年	2	10			9	1				
3年		9			10	3				
4年		12			7	2				1
5年	1	5	1	1	9	3	1		1	
6年	3	4	3	3	5	3		1		
計	6	53	4	4	47	14	1	1	1	1

表32 『一年生のおんがく～六年生の音楽』の調性



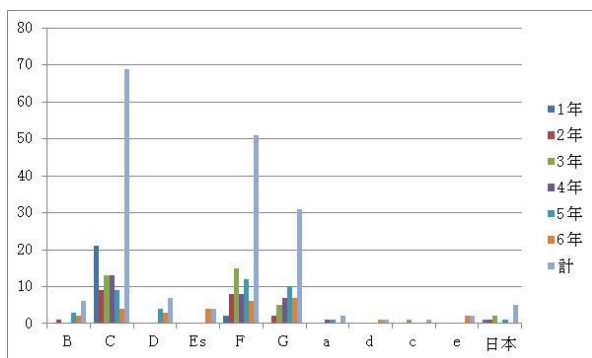
最後の国定教科書となった『一年生のおんがく～六年生の音楽』（文部省、教育芸術社、1950〈昭25〉年）の調性は下記の通りである。

C Dur と F Dur が圧倒的に多い。G Dur がそれに続く。B Dur、D Dur、Es Dur が、数は少ないが用いられているとはいえ、現在の調性選定の傾向に近づいているといえる。

表33 『1年生の音楽～6年生の音楽』の調性

	B	C	D	Es	F	G	a	d	c	e	日本
1年		21			2						1
2年	1	9			8	2					1
3年		13			15	5			1		2
4年		13			8	7	1				
5年	3	9	4		12	10	1				1
6年	2	4	3	4	6	7		1		2	
計	6	69	7	4	51	31	2	1	1	2	5

表34 『1年生の音楽～6年生の音楽』の調性



民間から発行され文部省の検定を経て採用されようになった『1年生のおんがく～6年生の音楽』（市川都市春他編、教育芸術社、1950〈昭25〉年～1957〈昭27〉年）の調性は次の通りである。

C Dur、F Dur、G Dur が圧倒的に多く、そのほかの調性は少なくなっている。

## 2 特徴

明治時代に始めて『小学唱歌集 全三編』が編纂されてから終戦直後に至るまでの唱歌集等の調性の傾向を見てきたが、よく用いられている調性はC Dur、F Dur、G Durであり、D Durもよく用いられる傾向があることが分かった。

また、B Dur、Es Dur、As Durといった♭が2つ以上用いられる調性や、E Dur、A Durなど♯が2つ以上用いられる調性もあり、戦前までは多様な調性も用いられていることが分かった。

戦後になると、C Dur、F Dur、G Durが圧倒的に多く用いられるようになることが分かった。

## IV 音域

一般に、6歳頃から12歳頃までの子どもたちが出しやすい音域は、C1からD2までと考えられる。そこで、各時代に編集された唱歌集等について、どのような音域が用いられているかを調査した。下方音域は「C1より下まで」と「C1以上」、上方音域は「D2まで」と「D♯2～E2」および「F2以上」に分けてその割合を調査した。図表およびグラフでは下記の丸数字を用いた。

- |                      |            |       |
|----------------------|------------|-------|
| ①『小学唱歌』(明15～17)      | 音楽取調掛      |       |
| ②『幼稚園唱歌集』(明20)       | 音楽取調掛      | 幼稚園用  |
| ③『明治唱歌』(明21)         | 大和田建樹・奥好義  |       |
| ④『教科適用 少年唱歌』(明26)    | 納所辨次郎・田村虎蔵 | 高等小用  |
| ⑤『新撰 国民唱歌』(明33)      | 小山作之助      |       |
| ⑥『教科適用 幼年唱歌』(明33～34) | 納所辨次郎・田村虎蔵 |       |
| ⑦『幼稚園唱歌』(明34)        | 瀧廉太郎ほか     | 幼稚園用  |
| ⑧『中等唱歌』(明22)         | 東京音楽学校     | 中学用   |
| ⑨『中学唱歌』(明24)         | 東京音楽学校     | 中学用   |
| ⑩『中等唱歌』(明32)         | 東京音楽学校     | 中学用   |
| ⑪『小学唱歌』(明25)         | 井沢修二       |       |
| ⑫『尋常小学唱歌』(明44～大3)    | 文部省        |       |
| ⑬『新訂 尋常小学唱歌』(昭7)     | 文部省        |       |
| ⑭『新訂 高等小学唱歌』(昭10)    | 文部省        | 高等小用  |
| ⑮『国民学校教科書』(昭16～18)   | 文部省        | 含高等小用 |
| ⑯『1～6年生の音楽』(昭22)     | 文部省        |       |
| ⑰『1～6年生の音楽』(昭25～27)  | 市川都市春ほか    |       |

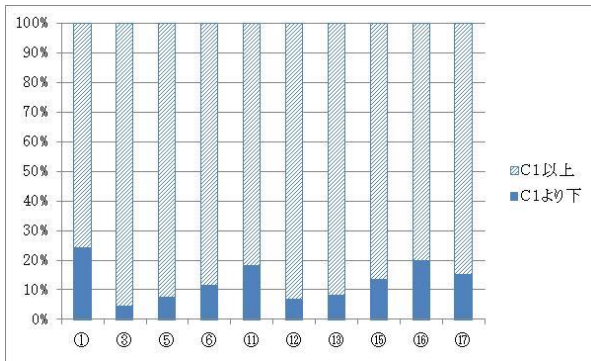
### 1 下方音域

①から⑰までの音域を下方音域と上方音域で調査した。下方音域はC1より下とC1より上に分けた。上方音域は、D2まで、D♯2からE2、F2以上に分けた。

表35 下方音域 (高等小を除く)

	①	③	⑤	⑥	⑪	⑫	⑬	⑮	⑯	⑰
C1より下	22	7	2	10	21	8	13	20	26	27
C1以上	69	151	25	78	95	112	149	129	106	154

表36 下方音域（高等小を除く）



このうち、わが国最初の唱歌集である①を見ると、C1より下の音域をもつ曲の割合が23.9%と比較的多い数になっている。具体的には、第一篇が2曲、第二篇が0曲、第三篇が20曲で、うちA0まで低い音域をもつ曲は7曲であり、G#0までとG0までが各1曲（この場合は合唱版）である。H0程度ならまだしも、A0まで低い音がある曲が実際に歌唱可能だったのか疑問が残る。

①の編纂に携わった井沢修二の編集である⑪もC1より低い音域をもつ曲の割合が18.1%と多くなっている。⑪では、A0まで低い音域をもつ曲は、全6巻のうち第2巻が3曲、第4巻が2曲、第6巻が1曲となっている。なかには、G0まで低い音域をもつ曲が第3巻で1曲ある。⑪は、低い音域に関しては、①と同じ傾向にあり、①の編集方針の影響が認められる。

C1より低い音域をもつ割合が比較的多い⑮は、低いといってもH0が大部分で、歌唱にさほど困難はなかったものと思われる。しかし、第6巻ではA#(Bb)0までが3曲、A0までが2曲ある。

最後の準国定教科書となった⑯は、C1より低い音域をもつ曲の割合が19.7%と、①に次いで割合が高くなっている。具体的には、5年生用で初めてA0が出現し、その数は4曲である。また、A#(Bb)0までは2曲ある。6年生用では、A#(Bb)0までが5曲、A0までが2曲となっている。これらの曲は、二部合唱になっており、低声パートにこれらの音が用いられている。

①⑮⑯は、音楽取調掛や文部省など、公的機関によって発行されたものであり、⑪もそれに準ずると考えることができる。これらの唱歌集等は、比較的低い音まで用いられていることが見て取れる。

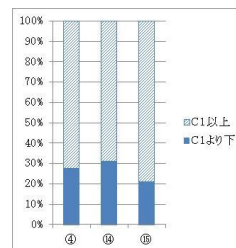
例外は、⑫と⑬で、いずれも文部省編集であるが、C1より低い音域をもつ曲の割合は6.7%、8%となっている。それも、⑫の場合A#(Bb)0までであり、3曲しかない。⑬の場合も、6曲しかない。

その一方で、小山作之助や納所辨次郎、田村虎蔵など、民間から発行された唱歌集は、C1より低い音域を用いた曲の割合は少ない。③が4.4%、⑤が7.4%、⑥が11.4%となっている。民間から発行される場合、他社との競合が生まれるわけで、歌いやすくなければ売れないという事情が影響しているものと思われる。

例外は⑰で、14.9となっているがH0までが多く4曲あるA0までの曲は三部合唱の低声用である。高等小学校用の唱歌集では、次のようになっている。

表37,38 下方音域（高等小）

	④	⑭	⑮
C1より下	22	27	8
C1以上	58	60	30

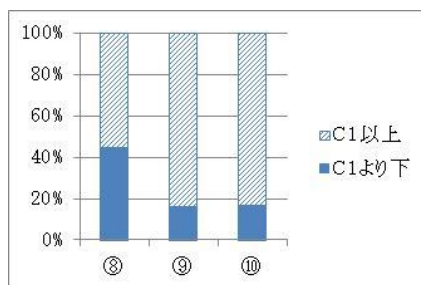


これを見ると、④が27.5%、⑭が31.0%、⑮が21.1%と、C1より低い音域まで用いている割合がほかの尋常小学校用の唱歌集と比較して高いことが分かる。これし、心身の発達にしたがって、声域も広がるという認識のもとにこのようになっているのだろうか。

中学校用の唱歌集では次のようになっている。

表39,40 下方音域 (中学)

中学	⑧	⑨	⑩
C1より下	8	6	5
C1以上	10	32	25

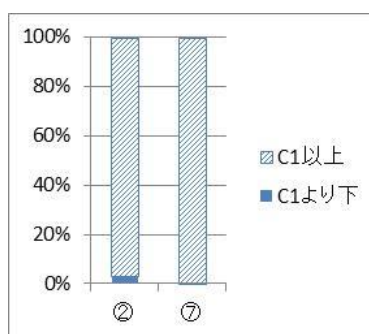


C1より低い音域の割合は、⑧が44.4%、⑨が15.7%、⑩が16.7%といずれも尋常小学校に比較して高くなっている。これも、高等小学校の場合と同様に、心身の発達にしたがって声域も広がるという認識のもとにこのようになっているのだろうか。

幼稚園用の唱歌集では、次のようになっている。

表41,42 下方音域 (幼稚園)

幼稚園	②	⑦
C1より下	1	0
C1以上	29	20



さすがに幼稚園の場合は、C1より低い音域は無理だという判断によるものと思われる。

表43 中山晋平〈シャボン玉〉冒頭部分



中山晋平が1923 (大12) 年に『シャボン玉』を発表した時、出だしの音が低すぎて子どもが歌えないというクレームがつき、2番目と同じ音にしたという逸話がある。

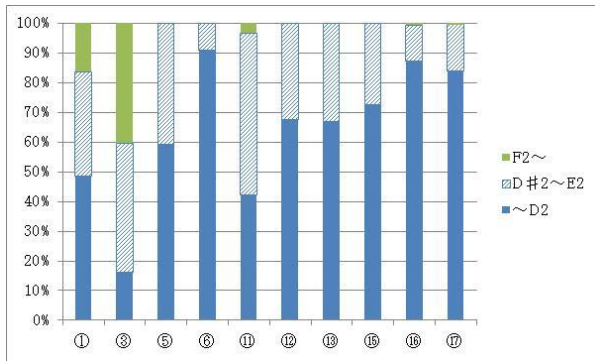
## 2 上方音域

表44 上方音域 (高等小を除く)

尋常小	①	③	⑤	⑥	⑪	⑫	⑬	⑮	⑯	⑰
~D2	44	27	16	80	49	81	108	108	115	152
D#2~E2	32	73	11	8	63	39	54	41	16	28
F2~	15	68	0	0	4	0	0	0	1	1

表44 上方音域 (高等小を除く)

表45 上方音域（高等小を除く）



わが国で最初の唱歌集である①を見ると、D2までの音域をもつ曲は全体の48.4%しかなく、D#2~E2が35.2%、F2以上が16.5%、D#2~が51.6%となっている。このうちF#2までが2曲、G2までが2曲となっている。子どもたちが楽に出せる上方音域を考えると、D#2以上が半数以上というのは実際に歌唱可能だったのか疑問が残る。下方音域の場合もC1より低い音域をもつ

曲が23.9%で、A0までが7曲あったことを考えると、①はわが国で最初に編纂された唱歌集ではあったが、当時の子どもたちがどの程度まで歌えたのかは疑わしいといえるのではないだろうか。

③もまた、上方音域が高い唱歌集といえる。D2までが16.1%しかなく、D2~D#2が約43.5%、F2以上も約43.5%、D#~は83.1%にもなる。うちF7からF#2までが13曲(7.7%)、G2が6曲(3.6%)もある。また、As2も1曲ある。実際に、約43.5%もあるF2以上の曲は、歌うことが可能だったのだろうか。

C1より低い音域をもつ曲が4.4%しかなかったことから、③は高い音域をもつ曲が多数を占める唱歌集であるといえるだろう。

⑪は、D2までが42.2%、D#2~E2が54.3%、F2~が3.4%、D#~が57.8%と、この唱歌集も高い音域をもつ曲が多い唱歌集であるといえるだろう。下方音域の場合と同様、これも①の編纂に携わった井沢修二の傾向を見ることができる。

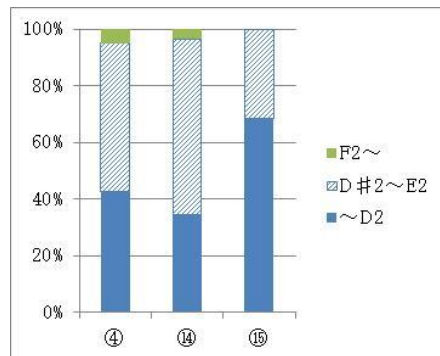
⑥は、D2までの曲が91.1%と最も多い唱歌集である。編者は納所辨次郎と田村虎蔵であり、共に言文一致唱歌を推進した人物である。田村らが考えていた言文一致唱歌の概念は、子どもに分かりやすい言葉、内容、歌いやすい音階やリズムを用いるというものである。したがって、使用音域についても、歌いやすい音域を考慮して作曲されていると考えることができよう。

小山作之助が編集した⑤もまた、D2までの曲が59.3%と多く、上限はE2である。後の⑫⑬⑮もまた、67.5%、66.7%、72.5%と多く、上限もE2である。さらに、最後の準国定教科書となった⑯、戦後まもなく民間から発行された⑰も、C1までの曲が95.0%、84.4%で、上限はE2である。これらは、子どもの声域を考慮して編集されていると判断できる。

高等小学校用の唱歌集では、次のようになっている。

表46,47 上方音域（高等小）

高等小	④	⑭	⑮
~D2	34	30	26
D#2~E2	42	54	12
F2~	4	3	0

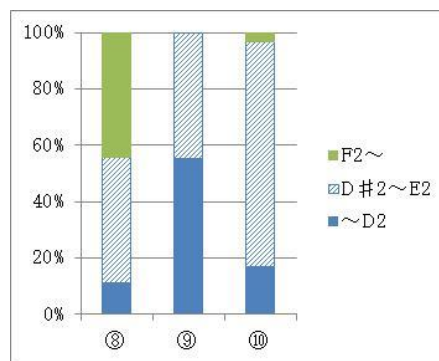


④と⑭では、D#2以上が57.5%、65.5%と半数以上を占めている。これは、下方音域と同様に、子どもたちの心身の発達が声域の広がりをもたらすという概念に基づいていると思われる。⑮は、国民学校1～6年と同様な上方音域の割合になっている。

中学校では、次のようになっている。

表48,49 上方音域 (中学)

中学	⑧	⑨	⑩
～D2	2	21	5
D#2～E2	8	17	24
F2～	8	0	1

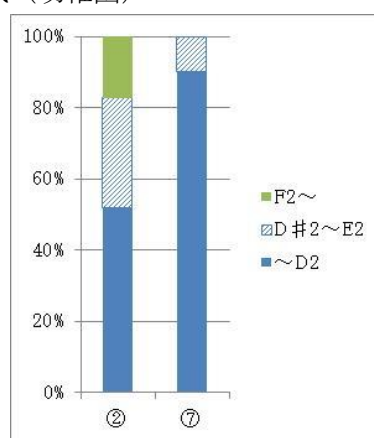


⑧と⑩は、D#2以上が55.6%、83.3%と、かなり高い音域を用いていることが分かる。⑨も44.7%と半数近くになっている。これも、高等小学校と同様に、心身の発達が声域の広がりをもたらすという概念に基づいていると思われる。しかし、歌う生徒が現在の高校生に当たる男子生徒であることを考えると、これは歌えないのではないだろうか。

幼稚園では、次のようになっている。

表50,51 上方音域 (幼稚園)

幼稚園	②	⑦
～D2	15	18
D#2～E2	9	2
F2～	5	0



音楽取調掛編の②は、D#2以上が48.3%と半数近くを占め、F2以上が5曲 (17.2%) となっている。幼稚園の子どもたちの声域を考えると、このよう高い音域は無理があるように思える。瀧廉太郎ほか編纂した⑦は、D#2～E2の割合が10%しかなく、この時期の子どもたちの声域を考慮した内容となっていることが分かる。

## V ヨナ抜き音階の割合

明治15 (1882) 年～17 (1884) 年発行の①音楽取調掛編『小学唱歌 全三篇』、②明治20 (1887) 年発行の音楽取調掛編『幼稚園唱歌』、③明治21 (1888) 年発行の大和田建樹・奥好義編『明治唱歌』、④明治25 (1892) 年発行の井沢修二編『小学唱歌』、⑤明治26 (1893) 年発行の納所辨次郎・田村虎蔵編『教科適用 少年唱歌』のヨナ抜き音階の割合は次のようになっている。

なお、以下の図表やグラフでは、完全なヨナ抜き音階であるものを◎、ヨナ抜き音階であるが経過音的にヨ音やナ音がわずかに用いられているものを○、完全にヨナ抜き音階ではないと判断できるものを×とした。

表52,53 ヨナ抜き音階の割合 (『小学唱歌』)

①	◎	○	◎○	×
初	5	1	6	27
二	2		2	14
三	1		1	41
計	8	1	9	80

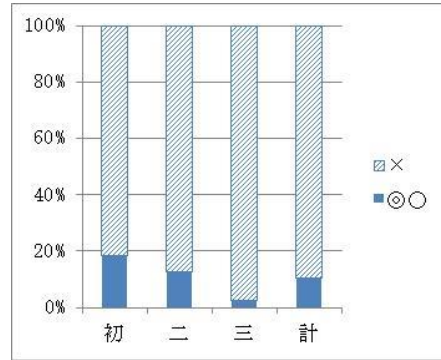


表54,55 ヨナ抜き音階の割合 (『幼稚園唱歌』)

②	◎	○	◎○	×	合計
	1	1	2	27	29

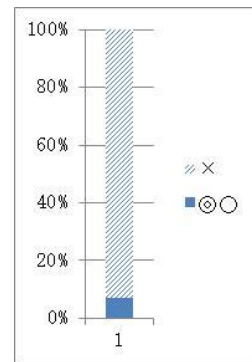


表56,57 ヨナ抜き音階の割合 (『明治唱歌』)

③	◎	○	◎○	×	計
1	4	2	6	23	29
2	1	1	2	27	29
3	1	1	2	25	27
4	2	1	3	26	29
5	1	1	2	27	29
6	2		2	23	25
計	11	6	17	151	168

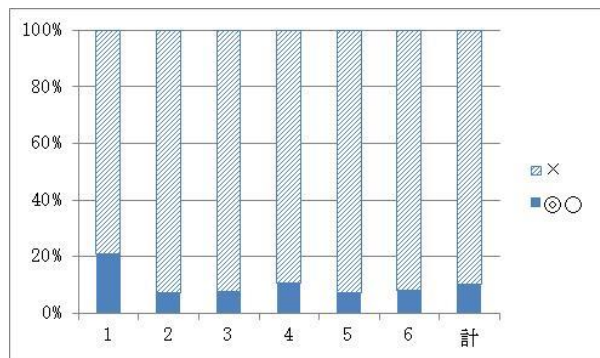


表58,59 ヨナ抜き音階の割合 (井沢編『小学唱歌』)

①	◎	○	◎○	×	
1巻	4	3	7	10	17
2巻	4		4	27	31
3巻				23	23
4巻		1	1	24	25
5巻	1		1	5	6
6巻				14	14
計	9	4	13	103	116

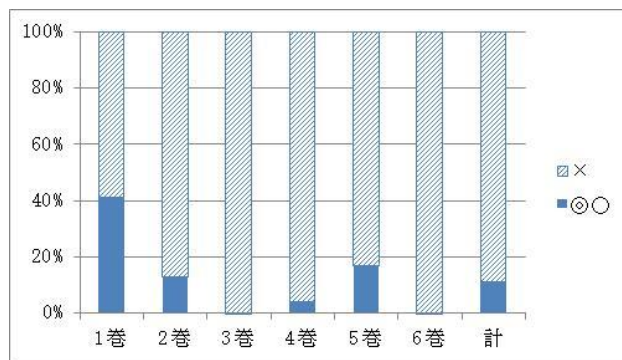
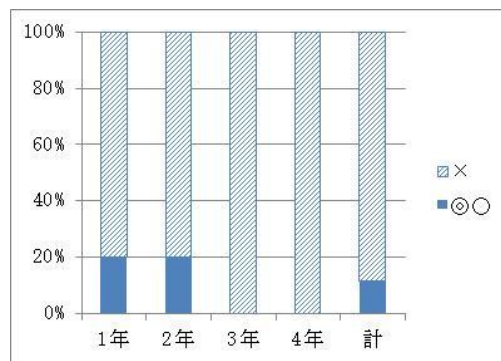


表60,61 ヨナ抜き音階の割合 (『教科適用 少年唱歌』)

④	◎	○	◎○	×
1年	2	2	4	16
2年	2	2	4	16
3年				20
4年				20
計	4	4	8	62



ヨナ抜き音階は、「音楽取調掛長であった井沢修二は、東西二洋の音楽を折衷することを目的として多くの改革を試みたが、そのひとつとして、雅楽の呂旋法と西洋の長音階が類似しているという性急な結論を導き出して、(中略)日本人には五音音階が適するという判断から長音階の七つの音から呂旋法に用いられる5つの音を選び出してヨナ抜き音階を作り、これが学校唱歌を中心に使用されはじめた」(音楽之友社『新訂 標準音楽辞典トワ』、2044p)と一般に認識されている。

しかし、明治10～20年代にかけて発行されたこれらの唱歌集でのヨナ抜き音階の割合は低い。ヨナ抜き音階を導入したとされる井沢修二による『小学唱歌』でさえ、第1巻が40%を超えているだけで、あとは低い割合になっている。ヨナ抜き音階は本当に井沢修二によって作られたのか疑問が残る。音楽取調掛は、明治20(1887)年に東京音楽学校として発展的に解消(初代校長は井沢修二)され、井沢の唱歌集は彼が文部省を非職となった明治24(1891)年の翌年に発行されている。自らの理想に基づき編纂したと言われるこの唱歌集にヨナ抜き音階があまり用いられていないのはなぜだろうか。

明治20年代に中学校用として発行された東京音楽学校編『中等唱歌』(明22)、東京音楽学校編『中学唱歌』(明24)、また明治32(1899)年発行の東京音楽学校編『中等唱歌』(明32)のヨナ抜き音階の割合は次のようになっている。



表62,63 ヨナ抜き音階の割合 (明22『中等唱歌』)

㊸	◎	○	◎○	×
	2		2	16

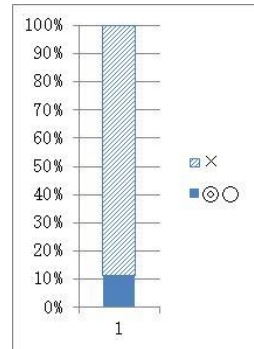


表64,65 ヨナ抜き音階の割合 (『中学唱歌』)

㊸	◎	○	◎○	×
	4	4	8	30

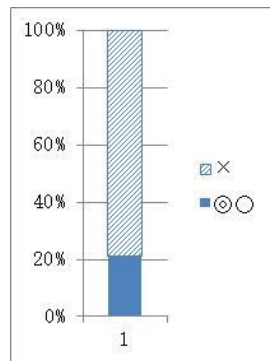
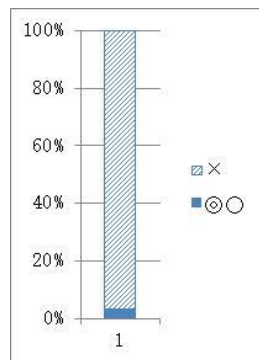


表66,67 ヨナ抜き音階の割合 (明32『中等唱歌』)

㊸	◎	○	◎○	×
	1		1	29



これらの唱歌集も、ヨナ抜き音階の割合は低い。

したがって、明治10半ばから～30年代初頭にかけて、ヨナ抜き音階はまだ一般的ではなかったかもしれない。

明治33 (1900) 年発行の小山作之助編『新撰 国民唱歌』および明治33年から34 (1901) 年発行の納所辨次郎・田村虎蔵編『教科適用 幼年唱歌』のヨナ抜き音階の割合は次のようになっている。

表68,69 ヨナ抜き音階の割合 (『新撰 国民唱歌』)

⑤	◎	○	◎○	×	計
1	2	1	3	1	4
2	1	1	2	4	6
3	2		2	3	5
4	1		1	5	6
5	4	1	5	1	6
計	10	3	13	13	26

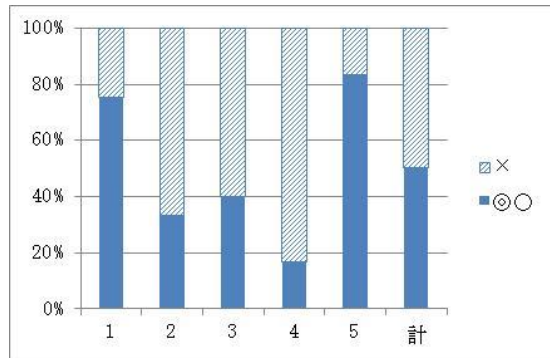
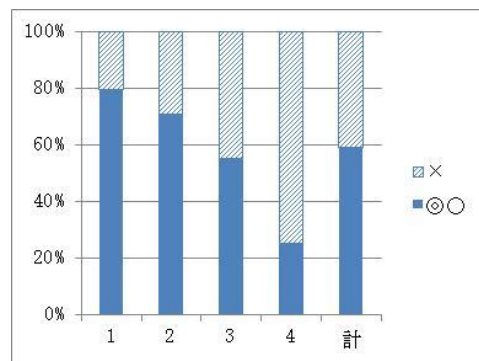


表70,71 ヨナ抜き音階の割合 (『教科適用 幼年唱歌』)

⑥	◎	○	◎○	×	計
1	14	5	19	5	24
2	11	6	17	7	24
3	6	5	11	9	20
4	3	2	5	15	20
計	34	18	52	36	88



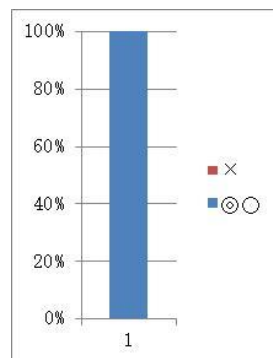
『新撰 国民唱歌』の場合、最も多いのは5の83%で、次いで1の75%、3の40%となっている。全体でも50%がヨナ抜き音階である。

『教科適用 幼年唱歌』の場合、最も多いのは1の79.2%で、次いで2の70.8%、3の55%となっている。全体でも59.1%がヨナ抜き音階である。またこの唱歌集では、巻数が増すにしたがってヨナ抜き音階の割合が減少している。これは子どもの音楽的能力の発達段階を考慮してのことかもしれない。

明治34 (1901) 年発行のわが国で最初の伴奏つき唱歌集である瀧廉太郎ほか編『幼稚園唱歌』では、すべての曲がヨナ抜き音階である。

表72,73 ヨナ抜き音階の割合 (瀧『幼稚園唱歌』)

⑦	◎○	×
	20	0

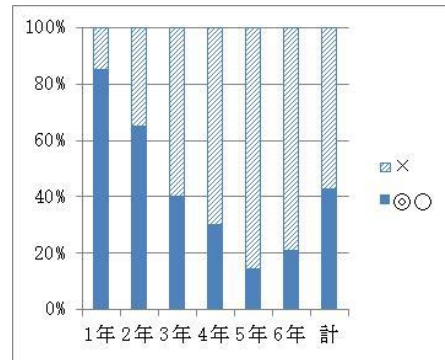


したがって、ヨナ抜き音階は、明治30年代になって普及してきたと考えられ、考案した人物も井沢修二というよりは、小山作之助、作之助に師事した瀧廉太郎、言文一致唱歌を提唱した納所辨次郎、田村虎蔵らあたりもしくはその周囲にいた人物と推察できるが確証はない。

明治44 (1911) 年から大正3 (1914) 年にかけて発行された文部省『尋常小学唱歌』のヨナ抜き音階の割合は次のようになっている。

表74,75 ヨナ抜き音階の割合 (『尋常小学唱歌』)

⑫	◎	○	◎○	×	
1年	14	3	17	3	20
2年	10	3	13	7	20
3年	3	5	8	12	20
4年	2	4	6	14	20
5年	1	2	3	18	21
6年	1	3	4	15	19
計	31	20	51	69	120

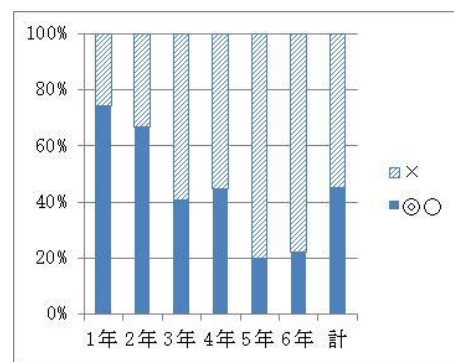


1年生では85%という非常に高い割合でヨナ抜き音階が用いられている。その後学年が進むにしたがって割合が減少し、5年と6年を合わせた高学年では17.5%とかなり七音音階に近づいているのが見て取れる。

大正時代を経て、子どもたちに評判がよくなかった曲を取捨選択し、新しい曲も加えて昭和7 (1932) 年に発行された文部省『新訂 尋常小学唱歌』のヨナ抜き音階の割合は次のようになっている。

表76,77 ヨナ抜き音階の割合 (『新訂 尋常小学唱歌』)

⑬	◎	○	◎○	×	
1年	17	3	20	7	27
2年	14	4	18	9	27
3年	5	6	11	16	27
4年	5	7	12	15	27
5年	3	2	5	20	25
6年	4	2	6	21	27
計	48	24	72	88	160



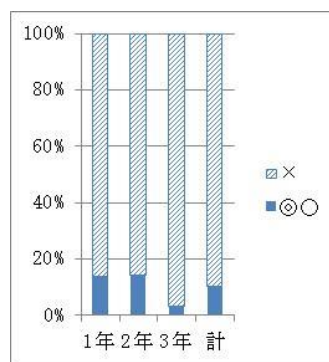
全体的には『尋常小学唱歌』と似ており、低学年が割合が高く、学年が進むにしたがって割合が低くなる傾向を示している。

これも、子どもの心身の発達、音楽的能力の発達を考慮しての配列であったかもしれない。

昭和10 (1935) 年の文部省『新訂 高等小学唱歌』のヨナ抜き音階の割合は次のようになっている。

表78,79 ヨナ抜き音階の割合 (『新訂 高等小学唱歌』)

⑭	◎	○	◎○	×	
1年	2	2	4	25	29
2年	3	1	4	24	28
3年	1	1	1	29	30
計	6	4	9	78	87

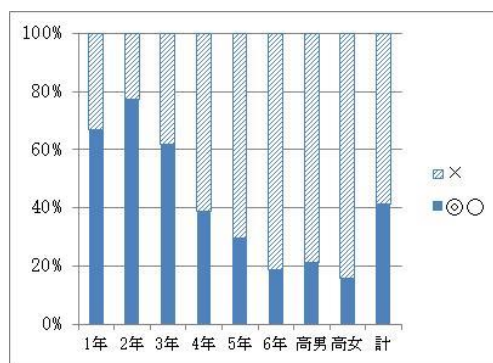


全体として割合が低いですが、これも尋常小学校の場合と同様に、子どもの心身の発達、音楽的能力の発達を考慮した結果かもしれない。

昭和16 (1941) 年～昭和18 (1943) 年の文部省「国民学校の教科書」のヨナ抜き音階の割合は次のようになっている。

表80,81 ヨナ抜き音階の割合 (「国民学校の教科書」)

⑮	◎	○	◎○	×	
1年	13	1	14	7	21
2年	14	3	17	5	22
3年	11	5	16	10	26
4年	5	5	10	16	26
5年	3	5	8	19	27
6年	4	1	5	22	27
高男	3	1	4	15	19
高女	2	1	3	16	19
計	55	22	77	110	187

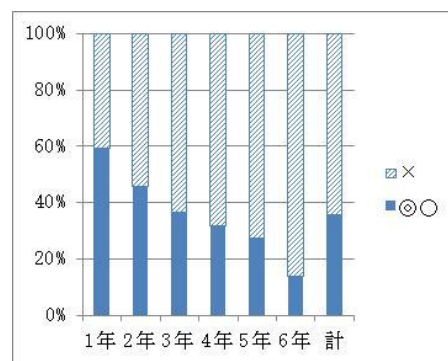


これも、低学年で割合が高く、学年が進むにしたがって割合が低くなっている。

最後の準国定教科書として昭和22 (1947) 年に発行された文部省『1～6年生の音楽』のヨナ抜き音階の割合は次のようになっている。

表82,83 ヨナ抜き音階の割合 (「国民学校の教科書」)

⑯	◎	○	◎○	×	
1年	11	2	13	9	22
2年	7	3	10	12	22
3年	5	3	8	14	22
4年	4	3	7	15	22
5年	2	4	6	16	22
6年	2	1	3	19	22
計	31	16	47	85	132

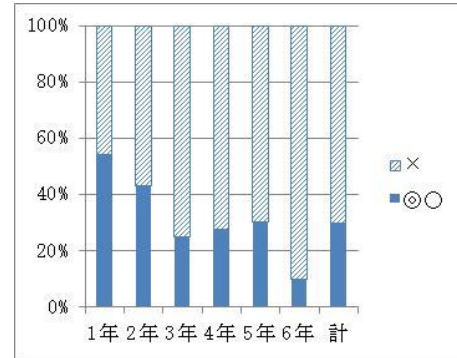


低学年の割合が高く、学年が進むに従って低くなる傾向がここからも見て取れる。

戦後になって、民間の出版社である教育藝術社が昭和25（1950）年～昭和27（1952）年の間に発行した『1～6年生の音楽』のヨナ抜き音階の割合は次のようになっている。

表84,85 ヨナ抜き音階の割合（教藝『1～6年生の音楽』）

⑰	◎	○	◎○	×	
1年	11	2	13	11	24
2年	6	3	9	12	21
3年	4	5	9	27	36
4年	3	5	8	21	29
5年	7	5	12	28	40
6年	3		3	28	31
計	34	20	54	127	181



これも同様に低学年の割合が高く、学年が進むにしたがって低くなる傾向が現れている。

ヨナ抜き音階は、明治20年代ではまだあまり使用されず、明治30年代になってから普及し始め、一般的になり、明治44（1911）年の文部省『尋常小学唱歌』では1年生で85%という高い割合で使用されるようになった。低学年が高く学年が進むにしたがって低くなるという傾向は、明治33（1900）年～明治34（1901）年の納所辨次郎・田村虎蔵編『教科適用 幼年唱歌』にすでに見られ、以来明治44（1911）年～大正3（1914）年の文部省『尋常小学唱歌』、昭和16（1941）年～昭和19（1944）年の文部省『新訂 尋常小学唱歌』、昭和16（1941）年～昭和18（1943）年の文部省「国民学校の教科書」、昭和22（1947）年の文部省『1～6年生の音楽』、昭和25（1950）年～昭和27（1952）年の教育藝術社『1～6年生の音楽』に至るまで続く。

また、明治33（1900）年の小山作之助編『新撰 国民唱歌』、明治33（1900）年～明治34（1901）年の納所辨次郎・田村虎蔵編『教科適用 幼年唱歌』、明治44（1911）年～大正3（1914）年の文部省『尋常小学唱歌』、昭和16（1941）年～昭和19（1944）年の文部省『新訂 尋常小学唱歌』まで、最も高い割合が約80%前後であり、昭和16（1941）年～昭和18（1943）年の文部省「国民学校の教科書」からは、最も高い割合は60%台前後になっていることが分かる。

## VI 結論

調性が最も多岐に渡っていたのは音楽取調掛編『小学唱歌』、井沢修二編『小学唱歌』、大和田・奥編『明治唱歌』である。全般的には、C Dur、D Dur、F Dur、G Durを中心にしながら、B Dur、Es Durなども用いられている。これがC Dur、F Dur、G Durの3種類に集約されていったのは戦後になってからである。富山県の戦前の小学校校歌が、C Dur、D Dur、F Dur、G Durを中心にほかの調性も用いていたのはこうした唱歌集の傾向と関係があるかもしれない。なお、富山県の小学校の校歌がC Dur、F Dur、G Durに集約されたのは昭和46（1971）年以降である。

音域では、音楽取調掛編『小学唱歌』、井沢修二編『小学唱歌』、納所・田村編『教科適用少年唱歌』（高等小学校用）、文部省『新訂 高等小学唱歌』、文部省『中等唱歌』（明治22）、文部省『中

学唱歌』、文部省『中等唱歌』(明 42) が、低い音域の割合が高い。また、音楽取調掛編『小学唱歌』、音楽取調掛編『幼稚園唱歌』、大和田・奥編『明治唱歌』、文部省『中等唱歌』(明治 22)、文部省『中学唱歌』、文部省『中等唱歌』(明 42)、井沢修二編『小学唱歌』が、高い音域の割合が高い。比較的高い音域の割合が低いのは、納所・田村編『教科適用 幼年唱歌』、文部省『尋常小学唱歌』、文部省『新訂 尋常小学唱歌』、文部省「国民学校の教科書」である。両方の割合が高いのは、音楽取調掛編『小学唱歌』、井沢修二編『小学唱歌』、文部省『中等唱歌』(明治 22)、文部省『中学唱歌』、文部省『中等唱歌』(明 42) である。

ヨナ抜き音階の割合は、小山編『新撰 国民唱歌』(明 33)、納所・田村編『教科適用 幼年唱歌』(明 33~34)、瀧ほか編『幼稚園唱歌』(明 34) がそれぞれ 50%、65%、100%となっている。これ以前は、井沢編『小学唱歌』の 1 巻 41.2%を除き、低い割合に留まっている。ヨナ吹き音階の割合が高くなるのは、明治 30 年代に入ってからで、以後文部省『尋常小学唱歌』『新訂 尋常小学唱歌』『国民学校の教科書』『1~6 年生の音楽』と続く。

学年が進むにしたがって割合が低くなる傾向は、すでに音楽取調掛編『小学唱歌』に見られる。はっきり形として現れるのは納所・田村編『教科適用 幼年唱歌』からで、文部省『尋常小学唱歌』、文部省『新訂 尋常小学唱歌』、文部省「国民学校の教科書」、文部省『1~6 年生の音楽』(昭 22) へと続く。

これらの傾向からは、明治に溯るわが国の唱歌の歴史のなかで、調性・音域が次第に整理されていったこと、ヨナ抜き音階も子どもの発達段階を考慮し、学年が進むにしたがって割合が低くなるように整理されていったことが見て取れる。

## Ⅶ 引用・参考文献

- ・齊藤基彦、復刻 明治の唱歌 I~IV (2015)、文憲堂
- ・新訂 標準音楽辞典 第二版 (2010)、音楽之友社
- ・千葉優子、ドレミを選んだ日本人 (2007)、音楽之友社
- ・丸山忠璋、田村虎蔵の生涯 (1998)、音楽之友社
- ・市川都志春、一年生のおんがく (1950)、教育藝術社
- ・市川都志春、石桁真礼生、田中準、二年生のおんがく (1951)、教育藝術社
- ・山田耕筰、下総皖一、三年生の音楽 (1952)、教育藝術社
- ・市川都志春、四年生の音楽 (1950)、教育藝術社
- ・山田耕筰、下総皖一、五年生の音楽 (1952)、教育藝術社
- ・市川都志春、六年生の音楽 (1950) 年、教育藝術社